

始まり—高校

私が教師を目指し始めたのは、高校一年生の頃のことだ。そこで出会った英語の先生に憧れを抱き、教育学部への進学を決めた。以来、現在に至るまでその熱は収まることを知らない。しかし、常に高いモチベーションを保ち続けてきたわけではない。高い理想に向けて前進し続けながらも、ときには目標を見失い、途方に暮れることもあった。紆余曲折を経て、今、大学4年生の7月、社会への出立を目前に控え、大きな転換期に立っている。

迷いと後悔—大学入学

これから始まる学びの日々や夢のキャンパスライフに期待を膨らませながら、ここ明星大学の地を踏んだ。しかしその実態は、想像していたものとは大きくかけ離れていた。当時世間を騒がせていた疫病の影響で、全ての授業はオンラインでの実施となった。慣れない中でのリモート授業で、期待していたほどの学びが得られない。教師や他の学生と会うこともなく、コミュニティも作れない。キャンパスには人気が無く、カフェやコンビニも開いていない。そんな環境下で私は、すべきことを見失うこととなった。本当にここで、自分がやりたかったことは果たせるのか。そもそも自分は何のために進学したのか。この頃の私は、毎日習慣的に行っていた英語の勉強さえ辞めてしまうほどに意欲を失い、低迷していた。

後期になり、やっとの思いで対面授業にありつくことができた。体育の卓球の授業で、他の学生たちと直接交流し、非対面授業に対する不満を共有できたことで、落ち込んでいた気持ちは幾分か回復した。また、私が教職に進むことについて疑問を抱き始めたのは、この授業が発端である。親しくなった並木先生が、私の英語の能力を高く評価し、様々な提案をしてくれたのがきっかけだ。海外留学から、外資系企業など英語力を活かせる職業まで、たくさんの可能性を示してくれた。ひどく狭かった私の視野が、急激に広がっていくのを感じた。世界を舞台に活躍する自分の姿を想像し、胸が躍った。それと同時に、それまで知ることのなかった多くの新たな道が見えたことで、本当にこのまま教員になってよいのか悩み始めた。そして、狭い選択肢の中からほぼ直感的に教員になることを決め、教育学部を選んでしまった自分を悔やんだ。教職以外の進路を選べば、これまでの積み重ねが無駄になるのではないか。教育学部での就活は苦勞するのではないか。そんな不安に駆られた。新たな可能性を見出した喜びと、過去の選択への後悔や将来への不安。矛盾した気持ちを抱えたまま、大学生活最初の1年間を終えた。

模索と迷走—大学2，3年

2年生になり、教職と並行しながら、少しずつ就活に手を付け始めた。教職に固執せずには他の職業を探すことで、自身の能力をより発揮できる場を見つけたいという思いであった。しかし、そのすべり出しは決して順調ではなかった。自分に向いている仕事は何なのか、そもそもどんな業種があるのか、何も分からない状態からのスタートであったためだ。教育学部においては、教員採用試験対策についての情報は嫌というほど流れてくるのに、就活に関しての情報は著しく不足する。そんな不自由な状況の中、手探りで就職先を探す活動にあたっていた。加えて、「教育以外」「できれば英語を使いたい」という漠然とした条件しか決まっていなかったことも、迷いを増幅させた。あらゆる業界を見漁っては悩むこ

とを繰り返していく内に自分のやりたいことが分からなくなっていき、迷走状態から抜け出せなくなっていった。

加えて3年生からは、かながわティーチャーズカレッジも始まった。教員採用試験が一次免除になると聞き、英語のチャレンジコースの選考に挑戦した。論作文と英語の面接試験を経て、無事に通過した。しかし、喜びもつかの間であった。私を待っていたのは多忙を極めた苦しい日々だった。隔週の登校、合格必須の作文課題、スクールライフサポーターや各種ボランティアなど慣れない場所での活動。就職活動やアルバイトとの兼ね合いもあり、徐々に体が追い付かなくなっていった。一日の睡眠時間は、ひどいときは2、3時間程度であった。そんな日が何日も続き、大学の学修に身が入らなくなっていった。欠席は増え、成績も下がり、周りの学生や教員からの評価も落ちていった。いくつものことを同時に抱え込んだ結果、どれも中途半端になってしまっている現状。どんどん自分に自信を失っていった。

決意—大学3，4年

そんな辛い日々の中でも、事態が好転する出来事もあった。かながわティーチャーズカレッジの活動の一環で、スクールライフサポーターとして自宅の隣町の高等学校に通っていた。そこで出会った英語科の先生に感化され、それまで見えなくなってしまっていた自身の「夢」を思い出すこととなった。それは、子どもの世界を広げることである。まず、子どもに成功体験を積み重ね、自信を与える。「やればできるんだ」と自身のポテンシャルに気付かせ、挑戦や成長の動機づけをする。そして、様々な可能性を提示する。あらゆる分野や地域での進路を提示し、可能性の広さに気づかせる。その中で、子どもがそれぞれに合った目標を見つける支援をする。こうして、子どもが可能性を最大限に発揮できるようにサポートすることが、私の果たしたい夢である。

またその先生は、韓国で10年間教師をしたり、日本で民間企業に勤めたりと、豊富な経験を持っている。これを基に、子どもに色々な選択肢を提示したり、経験を紹介して興味を持たせたりしていた。まさに私がなりたい教師像を具現化している教師に出会い、話を聞いたことで、感銘を受けた。そして、改めて原点に戻り、自分がすべきことが明確に見えてきた。教職とは別の経験を持つこと、また海外進出をして、視野を広げること。そして、自分の夢を叶えられる理想の教師になること。こうして、落ち込んでいた意欲に復活の兆しが見えてきた。

加えて、母校の高等学校での教育実習も、私の教職に対するモチベーションの回復を助けた。この3週間は、大きなやりがいを感じられるものであった。経験を重ねていくうちに授業がどんどん向上していったことで、自身の成長を実感することができた。また、高校生たちとの会話で盛り上がったり、信頼関係を築いたり、生徒との交流を楽しむこともできた。さらには、多くの先生方から高い評価をいただいたことも、これを後押ししている。教職の魅力が改めて痛感したと同時に、自身の教職への適性を認めることにもつながった実習であった。

こうして自身の理想像を改めて確認し、教師になることを決めた。そしてこれを契機に、そのための人生設計をスタートした。

理想を追い求めて—大学4年

私が掲げる理想の教師には、新卒ではなることはできない。この結論を見出した私は、教員採用試験を辞退し、就職活動に専念することに決めた。このようにして、希望進路を民間企業に定めて本格的に動き出した。自分に必要な資質・能力は何か。それを実現できる職場はどこか。これらを模索しつつ、地道なスキルアップを続けている。理想の教師になる日を目指して。その後の夢の実現を思い描いて。